

「肝硬変のマネジメント」

旭川医科大学副学長 水戸 廸郎 編集
久留米大学教授・第2内科 谷川 久一

関東労災病院院長・東京大学名誉教授

森 岡 恭 彦

10年前の1984年、水戸廸郎先生・故瀧野辰郎先生の編集で「肝硬変と肝腫瘍」が出版されている。手許にある同書をいま読み返してみると、内容的に物足りないところが多くなっている。10年の進歩・変化は著しいものである。

今般、水戸廸郎先生・谷川久一先生によって、この書は一新され「肝硬変のマネジメント」として発刊されたことは時宜を得たものである。本書では、表題だけでなく内容・執筆者もすべて新しく変更され、C型肝炎の記述を初めとして原発性胆汁性肝硬変、漢方薬治療、また肝移植などの項目が新たに加えられ、食道静脈瘤や肝細胞癌の治療方針などについての記載にも大きな変化がみられ、時代の変化が読みとれる。

編者らも述べているように、今日、わが国における慢性肝疾患患者数は推定およそ200万人、肝疾患による死亡者は年間約4万人とされており、近い将来激減するものと思われるが、今日なお肝硬変を中心とする肝疾患のマネジメントは重要な課題であることに変わりない。それだけに up-to-date な内容を持った書

が望まれるわけで、新たな企画で本書が出版されたことは喜ばしい。

言うまでもなくわが国の肝硬変は、B型・C型肝炎を主体に、アルコールの関与が重要な要因となっており、本書ではまずこれらの要因を基に肝硬変が成立していく過程についての最新の臨床的知見が述べられ、次いで、予後の推定を含めて肝硬変の診断・治療へと記述が進められている。また、前述のようにわが国では比較的まれな疾患とされる原発性胆汁性肝硬変の診断・治療についての記載も新たに付加されている。

また、肝硬変の重大な合併症である食道静脈瘤、出血性胃炎、腹水、再発性肝性脳症、更に肝細胞癌といった病態の発生、その診断・治療についての解説があり、末尾には肝移植の適応と編者らの21世紀に向けた提言が加えられている。

外科に関するものとして、肝硬変合併患者の手術の危険度、術前・術後の患者管理、また食道静脈瘤の手術に関する記載が、旧書に比べるとかなり縮小されており、この方面の治療において外科の占める役割が次第に小さくなってきている状況が読

みとれる。

全体として、肝硬変を中心とする病態についてのすべての up-to-date な情報が網羅され、わが国の一線級の専門家の先生方が、丁寧に解説されており、読みごたえがある。また各項目ごとに執筆者のまとめの言葉が述べられており、行き届いた参考文献も読者に便利な配慮である。

あえて、難点、希望といったものを述べさせていただくと、数十名にわたる分担執筆であることもあって、このような書の通弊として記述内容に不統一性が感じられる。また各専門家の先生方の中には、自らのデータを無難作に示されているため、一般の多忙な医師がベッドサイドで簡単に読むわけにはいかないとといった実用上の難点が感じられる。

ともあれ、肝硬変の臨床的病態、検査、治療に関する最新の知見を知るに手ごろな書として、内科・外科を問わず広く医師の皆様全般に推薦しうる書と思う。

● B5 頁338 図136 写真70
原色図30 1993 定価9,270円
(税込) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)